待降節第１主日礼拝説教「目を覚ましている理由」予稿

日本基督教団石神井教会　2025年11月30日

【使徒書日課】テサロニケの信徒への手紙一　5章1～11節

1兄弟たち、その時と時期についてあなたがたには書き記す必要はありません。
2盗人が夜やって来るように、主の日は来るということを、あなたがた自身よく
知っているからです。3人々が「無事だ。安全だ」と言っているそのやさきに、
突然、破滅が襲うのです。ちょうど妊婦に産みの苦しみがやって来るのと同じで、
決してそれから逃れられません。4しかし、兄弟たち、あなたがたは暗闇の中に
いるのではありません。ですから、主の日が、盗人のように突然あなたがたを襲
うことはないのです。5あなたがたはすべて光の子、昼の子だからです。わたし
たちは、夜にも暗闇にも属していません。6従って、ほかの人々のように眠って
いないで、目を覚まし、身を慎んでいましょう。7眠る者は夜眠り、酒に酔う者
は夜酔います。8しかし、わたしたちは昼に属していますから、信仰と愛を胸当
てとして着け、救いの希望を兜としてかぶり、身を慎んでいましょう。9神は、
わたしたちを怒りに定められたのではなく、わたしたちの主イエス・キリストに
よる救いにあずからせるように定められたのです。10主は、わたしたちのために
死なれましたが、それは、わたしたちが、目覚めていても眠っていても、主と共
に生きるようになるためです。11ですから、あなたがたは、現にそうしているよ
うに、励まし合い、お互いの向上に心がけなさい。

【福音書日課】マルコによる福音書　13章21～37節

21そのとき、『見よ、ここにメシアがいる』『見よ、あそこだ』と言う者がいて
も、信じてはならない。22偽メシアや偽預言者が現れて、しるしや不思議な業を
行い、できれば、選ばれた人たちを惑わそうとするからである。23だから、あな
たがたは気をつけていなさい。一切の事を前もって言っておく。」
24「それらの日には、このような苦難の後、
太陽は暗くなり、
月は光を放たず、
25星は空から落ち、
天体は揺り動かされる。
26そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見
る。27そのとき、人の子は天使たちを遣わし、地の果てから天の果てまで、彼に
よって選ばれた人たちを四方から呼び集める。」
28「いちじくの木から教えを学びなさい。枝が柔らかくなり、葉が伸びると、
夏の近づいたことが分かる。29それと同じように、あなたがたは、これらのこと
が起こるのを見たら、人の子が戸口に近づいていると悟りなさい。30はっきり言

っておく。これらのことがみな起こるまでは、この時代は決して滅びない。31天
地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない。」
32「その日、その時は、だれも知らない。天使たちも子も知らない。父だけが
ご存じである。33気をつけて、目を覚ましていなさい。その時がいつなのか、あ
なたがたには分からないからである。34それは、ちょうど、家を後に旅に出る人
が、僕たちに仕事を割り当てて責任を持たせ、門番には目を覚ましているように
と、言いつけておくようなものだ。35だから、目を覚ましていなさい。いつ家の
主人が帰って来るのか、夕方か、夜中か、鶏の鳴くころか、明け方か、あなたが
たには分からないからである。36主人が突然帰って来て、あなたがたが眠ってい
るのを見つけるかもしれない。37あなたがたに言うことは、すべての人に言うの
だ。目を覚ましていなさい。」

主が来られる【こども説教のために】

「アドヴェント・キャンドル」を灯す期節を迎えました。今日から、教会暦は「待降節（アドヴェント)」に入りました。「アドヴェント」の 4 本のロウソクが灯るまで、御子のご降誕（クリスマス）に備えて歩みます。

このとき、子どもたちとは「降誕の物語」を憶えながら過ごします。クリスマスの祝いの中で聞く「降誕の物語」を、あらかじめ聞いておくのです。聞くだけではありません。物語を一緒に演じる「降誕劇礼拝」に加わってもらいます。『聖書』と讃美歌で組み立てられた台本のある礼拝です。聖書朗読と讃美の歌に合わせて、皆が登場人物になりきって演じます。礼拝ですから，誰かに見てもらうために演じるわけではありません。いいえ、本当のことを言えば、礼拝ですから、そこにいる人はみな、ただ一人のお方に見てもらうために演じるのです。御子の御父である神にご覧いただくのです。

そのようにして、御子をお迎えする準備をいたします。御子を、わたしたちの大切なお方としてお迎えすることができるように、準備いたします。大切な主人をお迎えするように、準備いたします。

準備ができていなければ、そのときを迎えて、うろたえたり、驚いたりしてしまうかもしれません。それも仕方ないことかもしれません。わたしたちは、初めてのことを準備してうまく迎えられるとは限らないのです。

ですから、そのときには、助けてもらいましょう。すでにそのときを迎えたことがある人に、助けてもらいましょう。準備の仕方を倣わせてもらいましょう。

主イエスは、「**目を覚ましていなさい**」とお教えくださいました。そのときを迎えるために、目を覚まして備えているようにと。もちろん、たとえ居眠りしてしまっても、主イエスはわたしたちと共にいてくださるのです。

だれも知らない

先主日、六年ぶりに開催した「オープンチャーチ」には、久しぶりの方や初めての方が幾人もおいでくださいました。以前開催していたときもそうですが、「オープンチャーチ」は、しばらく教会から離れていらした方においでいただくには良い機会のようです。クリスマスやイースターにもご案内を差し上げていますが、「オープンチャーチ」のほうがハードルが低く感じられるのかもしれません。

案内をご覧になっておいでくださった方をお迎えできるのは、うれしいことです。先週も、久しぶりの再会を喜び合う場面が散見されました。あらかじめ予告しておいでくださる方もありますが、多くの方は、予告なしにおいでくださるので、お迎えしたときには喜びよりも驚きが先にくることがしばしばです。

困ったことに、そのようなときに咄嗟にお名前が出て来ないことがあります。察してご自分から名乗ってくださる方も少なくありませんが、思い出せないままのこともあります。そのようなときは、後からこっそり記名表を確認させていただいたり、過去の来会者カードを繰ってみたりするのです。もちろん、最後には開き直って、お名前をお聞かせいただくこともあります。

石神井教会に着任したとき、わたしは皆さんに、すぐにはお名前を覚えきれないので必ず名乗ってくださいとお願いいたしました。名札の着用も提案しましたが、そのときには、常時の着用は採用してもらえなかったのです。今では、多くの皆さんが来会時に名札を付けてくださっています。それは、お互いのために、大きな助けになっているのではないでしょうか。

わたしたちは、だれかと会うとき、相手が自分のことを知っていると思えば、あらためて名乗ったりしないものです。初対面でもないのに名乗るのは、相手にしっかり認識してもらえていないかもしれないと思うからでしょう。

もちろん、世の中には、人の名を憶え、一人ひとりのことをはっきりと記憶することが得意な人がいるものです。主イエスは、どうだったのでしょうか。突然の来客に、相手の名前が出てこなくて戸惑うことはなかったのでしょうか。そのようなことがないように、多大な努力をされていらした、ということがあったのでしょうか。

「**その時がいつなのか、あなたがたには分からない**」だろうから、「**目を覚ましていなさい**」と、主イエスはおっしゃいます。主イエスがおっしゃる「その日、その時」は、何もいつか訪れる「終わりの日」のことに限らないでしょう。わたしたちにとって、「**その日、その時**」は、日々訪れます。大切な瞬間、人との出会いもそうです。「その日、その時」は突然訪れるのだから、そのときうろたえないように備えよと、主イエスはおっしゃるのです。

眠っていても

讃美歌「『起きよ』と呼ぶ声」を、待降節の讃美歌として毎年歌っています。元になっているのは、マタイ福音書 25 章にある「十人のおとめのたとえ」です。婚宴の祝いのときを待つおとめたちが皆、居眠りをしてしまうのです。真夜中、花婿の到着を告げる声が聞こえます。花婿を出迎え、婚宴の会場に向かわなければなりません。そこに向かうには、ともし火が必要です。ともし火の油を用意していた五人のおとめは、すぐに花婿を迎え、婚宴会場に向かうことができます。しかし、用意していなかった五人のおとめは、すぐに向かうことができず、祝いの場から締め出されてしまう、というたとえ話です。「終末の教え」とも言われます。そのたとえ話を歌う讃美歌を、教会は、待降節の讃美歌として歌ってきました。

御子のご降誕を祝う教会は、そのときに御子をお迎えいたします。おいでになられる御子をお迎えいたします。

もちろん、教会は、この祝いを決まった祝日に祝うのです。「降誕日」が定められてきました。わたしたちの習慣では、その日よりも前の日曜日に祝うこともありますが、それもあらかじめ決めて行うことです。そのときを迎える準備を怠るというのは、余程のことです。わたしたちも、例年どおり「待降節」を設けて、備えようとしています。その意味で、わたしたちは、御子をお迎えするために目覚めているし、ともし火の油も用意している、と言ってよいのかもしれません。

それでも、教会は、きちんと待降節を迎えたわたしたちが「十人のおとめのたとえ」を思い起こすように教えてきました。一人残らず皆、眠ってしまった、おとめたちのたとえです。

テサロニケの教会に宛てて、「**主の日は来る**」と繰り返すのは、使徒パウロです。主イエスがお教えのように、「**目を覚まし**」ていなさいと教えます。その日、主イエスをお迎えして恥ずかしくないように、**暗闇の中にいる者のように**ではなく、**光の子、昼の子**として目覚めた歩みをしなさい、と教えるのです。けれども、パウロは、わたしたち皆が、いつも目覚めていられるとも言いません。大切なことは、「**目覚めていても眠っていても、主と共に生きるようになる**」ことだと言うのです。

お迎えする方の名を失念することがあっても、わたしたちは、その方と共にいることができます。お迎えする準備ができていなくても、そのときに、共にいることはできるのです。備えていても、思いがけないときにお迎えすることになるかもしれません。思いがけない姿の方をお迎えすることになるかもしれません。それは、幼子の姿でしょうか。老いた者の姿でしょうか。わたしたちは、ただ、出て行ってその方をお迎えするのです。